

「本当のキリストさん」

今日の説教題を決めた後、なんだかちょっとモヤモヤしてしまいました。なんのモヤモヤかと言いますと、「この説教題、どっかで聞いたことあるんだよな」という。説教題をつける時の考え方と言うのは、牧師によって千差万別で、奇を衒った、もとい人目を惹く訴求効果の高そうな題をつける人もいれば、非常にシンプルに「神の救い」と言うようなド直球な題をつける方もいます。私は、どちらかと言えば、奇を衒うタイプの牧師かも知れません。で、今回の説教題について、どこかで聞いたことがある、と思って、私の過去の説教題を調べてみますと、昨年 5 月 14 日に「キリストさん」という題で説教をしていることが分かりました。何のことはない、自分で前に付けた奇を衒った説教題だったということです。しかも、まだ 1 年も経っていないのに、記憶力の低下が進んでいる良い証拠と言えます。

まあ、せっかく前の説教を掘り起こす機会を与えられたということで、昨年 5 月 14 日の説教を読み返してみました。実は、自分の書いた説教を後になって読み返すという行為は、自分の声を録音して自分で聴いてみる時のような、違和感と言うか、これじゃない感、という、そういう感覚があります。説教は、その時に持っていた興味関心や刹那の感情なども乗っかってきますので、今から 10 か月前というわずか昔の説教とは言え、今の私からすると、ちょっと認識や感覚のズレがあるわけです。と言うような、違和感、認識のズレに邪魔されつつ、それでもなお読んでみますと、これも不思議な感覚で、かなり恥ずかしいんですが、正直なところ、「なるほど、良いこと書いてあるやん」という自画自賛に行き着いたんですね。これは、なんと言いますか、牧師だからこそその特殊事例かも知れません。自分の書いた説教に、自分が慰められる、という。ちょっと

気持ち悪い感じがしないでもないですが、まあ、そういう可笑しい職務であるということですね。

という事で、10 か月ほど前の5月14日に語った有岡牧師の説教からの引用です。「この教会が建っている敦賀市本町2丁目の自治会総会があった当日は、隣の駐車場を挟んで西側にある血液センターの、その北側に位置している本町会館に集まりました。玄関を抜けると畳敷きの大広間があり、座椅子と座布団が用意されていました。大広間の入り口横に受付の人がいまして、『はて、どちらさんでしたか』みたいな視線を感じましたので、『敦賀教会から参りました、有岡です』と挨拶をしました。すると、『はあ、あそこのキリストさんね』と。噂には聞いていましたが、教会の牧師が、『キリスト』と呼称されることがあるという。こんなにも罪深いキリストがいて良いものなんだろうか、なんて、ちょっと考えつつ、『あ、はい、キリスト教会の者です』と答えました」。・・・「キリストさん」という言葉の出所は、自治会総会での一場面であったということですね。そして、この時の説教の結論は、こうでした。「『キリストさん』と呼ばれることは、私たちにとって喜びであり、また、重荷でもあります。信仰なんて持たなければ、経験する必要のなかった苦労や大変さもたくさんあります。でも、私たちは、ここには、なお良いものがあると信じて、ここには、幸せと恵みがあると信じて、集い、祈り、今日も共に笑顔で挨拶を交わします。地上的な価値観では、値踏みできない天上の宝が、ここにはあります。尽きない希望、現実には負けない信仰心、死してなお仰ぎ見ることのできる幸せな毎日、慈しみ合う隣人愛、ありのままを認めてくださる神様の懐の深さ、決して拒絶されない優しさと暖かさ、などなど。挙げればキリがないほどの豊かな恵みがここにはあります。『キリストさんが、集まるところは、なんかめっちゃええらしいで』という微笑ましい噂が流れるくらいに、私たちは、感謝と喜びと愛を携えて、今日も、この場所から派遣されていきたいと思います」。我ながら偉そうなことを言っている感じがしますが、でも、その通りになれば良いな、と思います。「キリストさん」と、牧師だけじゃな

く、信徒の方々も呼ばれるかも知れない、この日本社会にあって、その呼び方に違和感を憶えつつも、でも、「キリストさんが集う教会の良さ」を、どうにかして発信し続けて行きたいと思っています。私たちは、言うまでもなく、本当のキリストではありません。ただ、神様に祝福された一人ひとりであることは間違いありません。失敗をし、過ちを犯し、しかし、なお赦されて、祝福の内に生きる私たちです。

今日の聖書箇所は、祝福されているんだけど、でも、過ちから逃れられない、そんな私たちの歴史上の大先輩のお話を書かれていました。その大先輩と言うのは、イスラエルの初代国王サウルです。

イスラエルの歴史を赤裸々に語り残す旧約聖書にあって、そこに登場する重要人物たちの評価は、実はとても難しいものです。私たちは聖書を、聖なる書物、神様の偽りなき御言葉として読もうとします。しかし、そこには、過ちを犯し、神様から離れようとする多くの重要人物たちがいます。「油注がれた者」であったサウルという人も、神様から特別な祝福を受けた王様だったにも関わらず、最後は、自らの過ちと、さらに秀でた王様であるダビデの登場によって歴史舞台から退場せざるを得なくなります。「油注がれた者」とは、つまり、ヘブライ語でメシア、ギリシャ語でキリスト、英語でセイバー、日本語で救世主ということです。イスラエル初代国王のサウルは救世主であった、と理解して差し支えない。けれど、サウルは、神様に従わず罪を犯し、没落した。救世主が没落した、という、キリスト教的視点から見れば、あり得ないような歴史が、古代イスラエルにおいて織り成されたんだ、ということ、まずは受け止めないといけません。冒頭の「キリストさん」の話に絡めて言うなら、最初期の油注がれた「キリストさん」であったサウルは、キリストさんでありながら、その立場に相応しい最後を迎えることができなかつた、ということ、ということです。

調べてみると、ユダヤ教においても、このサウルという人物に関する評価は、かなり揺れているようです。イスラエルの初代国王として尊敬すべきという立場を取りつつ、けれど、神様の背いた人物として軽蔑に値するという、相いれない評価が両立しているような状態です。おそらく、サウルに限らず、多くの人間は、そういう二律背反的な、白とも黒とも言い切りがたい人生を送るものなのでしょうが、こと旧約聖書の重要人物としてのサウルは、その生涯の前半と後半でかなり評価が変わってくる人である、ということです。このサウルの一生涯について、ユダヤ教では一つの教訓を見出しています。それは、神様から頂いた権力には、必ず責任が伴うのであり、いくら偉い立場になったとしても、神様への忠誠を忘れてはならない、ということです。この教訓を伝える好例として、反面教師として、サウル王の伝承は語り継がれているようです。

では、キリスト教である私たちは、このサウルの一生涯を、どのように解釈すれば良いのでしょうか？ もちろん、ユダヤ教における教訓を、私たちも知るべきでしょう。「神様から頂いた権力には、必ず責任が伴うのであり、いくら偉い立場になったとしても、神様への忠誠を忘れてはならない」。ただ、この教訓を踏まえつつも、私たちには、「本当のキリストさん」が与えられていることを心の留めたいと思います。

ところで、神様から頂いた権力とは、いったい何でしょうか？ 王様としての権力、政治家としての権力、社長としての権力、園長としての権力、牧師としての権力。あると思います。しかし、それだけじゃないでしょう。年長者としての権力、古参としての権力、親としての権力、先輩としての権力、兄や姉としての権力、お客さんとしての権力などなど。社会的な組織に属さずとも、私たちの周りには、ごく自然な形で様々な権力が存在し、私たちは、その権力の幾分かを所有し、意図する、しないに限らず行使しています。自分は、何も影響を及ぼさない、謙虚さの塊だと思っけていても、そんな自分のことを敬い、大切にしてくれる存在がいる以上、私たちは、

ある意味でサウル王と同じ立場に立っていると言えます。それに加えて私たちはクリスチャンです。神様に招かれ、聖別され、特別に取り分けられた存在です。いくら謙虚さを装っても、私たちの放つキリストの香りは、キリストさんの影響力は消せません。普通、キリストの香りは良いものです。けれど、そこにもわずかではあれ、権力が宿るのなら、その香りは、悪臭に変わるかも知れない可能性を孕んでいます。

だからこそ、私たちは「本当のキリストさん」を意識しないとはいけません。自分の人生を捨てて、神様の子どもであることを貫き、十字架の上で自らの肉体が貫かれることを避けなかった「本当のキリストさん」をしっかりと受け止めないとはいけません。私たちの謙虚さは、本当のキリストさんである、我らの主イエス・キリストの謙虚さに比べたら、全然足元にも及びません。神の子でありながら、すべての罪を背負い、罵詈雑言を浴びせられながら自らの十字架の一部を担いで丘を登り、されるがままに、磔にされた。そんなイエス様のお姿を知って、私たちはクリスチャンとして与えられている祝福と栄光の意味を考え直さないといけません。その祝福は誰かに誇れることですか？ その栄光は誰かに競り勝つような類のものですか？ と。

この受難節にあって、とくに心に留めたいのは、私たちが頂いている祝福や栄光ではなく、私たちのために実現した主の十字架です。間違っても、主の十字架を信じる私たちが素晴らしいのではなくて、私たちのために実現した主の十字架が素晴らしいのです。そのことを、再度、深く心に留めたいと思います。キリストさんと呼ばれるかも知れない私たちは、「いやいや、本当のキリストさんはね・・・」という風に、自分を大きく超えて、優しく、寛容で、慈しみに満ちた方を紹介できるようでありたいと思います。まあ、唐突にキリストさんと声を掛けられて、即座に宣教態勢に入ることは難しいでしょうが・・・。心構えとしてですね。自分がクリスチャンであることに、救われるに相応しい存在であることに安心と確信を持ちつつも、誇れるのは自分の信

仰や教会生活ではなく、ただ主のみである、と常々心得ておくこと。当たり前と言えば、当たり前ですが、この受難節、その当たりのことを主の十字架を仰ぎ見ながら、再確認して参りたいと思います。

本当のキリストさんを頂く私たちに、いつも注がれている、愛と赦し、優しさと慈しみに感謝して。この新しい1週間も、神様と共に歩んで参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も何の功もない私たちを、ただ恵みによって招き、このように賛美と祈りの礼拝に与らせてくださり、感謝致します。今日から始まる1週間も、ただ、あなたへの感謝と、御子イエス・キリストへの感謝を携えて、ただ主の十字架を誇ることができますように。私たちの信仰を導き、お支えください。そして、赦された者同士、励まし合い、助け合い、主の道を歩むことができますように。その歩みを通して、キリストの良き香りを醸し出すことができますように。私ではなく、あなたの祝福と栄光を表すための良き器として、どうか私たちのことを十分に用いてください。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。